野薔薇

小川 未明

大きな国と、それよりは少し小さな国とが隣り合っていました。当座、その二つの国の間にはなにごとも起こらず平和でありました。

ここは都から遠い、国境であります。そこには両方の国からただ一人ずつの兵隊が派遣されて国境を定めた石碑を守っていました。大きな国の兵士は老人でありました。そうして小さな国の兵士は青年でありました。

二人は、石碑の建っている右と左に番をしていました。至って寂しい山の中でありました。そうして、まれにしかその辺を旅する人影は見られなかったのです。

初め、互いに顔を知り合わない間は、二人は敵か味方かというような感じがして、ろくろくものも言いませんかったけれど、いつしか二人は仲よしになってしまいました。二人は、他に話をする相手もなく退屈であったからであります。そうして、春の日は長く、うららかに、頭の上に照り輝いているからでありました。

ちょうど、国境のところには誰が植えたということもなく、一株の野薔薇が繁っていました。その花には、朝早くから蜜蜂が飛んできて集まっていました。その快い羽音が、まだ二人の眠っているうちから、夢心地に耳に聞こえました。

「どれ、もう起きようか。あんなに蜜蜂が来ている。」と、二人は申し合わせたように起きました。そうして外へ出ると、果たして、太陽は木の梢の上に元気よく輝いていました。

二人は、岩間から湧き出る清水で口をすすぎ顔を洗いにまいりますと、顔を合わせました。

「やあ、おはよう。いい天気でございます。」

「本当にいい天気です。天気がいいと気持ちまでがせいせいします。」

二人は、そこでこんな立ち話をしました。そうして、頭を上げて辺りの景色を眺めました。毎日見ている景色でも新しい感じを見るたびに心に与えるものです。

青年は、最初将棋の歩き方を知りませんでした。けれど老人について、それを教わりましてから、この頃はのどかな昼頃には二人は毎日向かい合って将棋をさしていました。

初めのうちは、老人のほうがずっと強くて、駒を落としてさしていましたが、しまいにはあたりまえにさして、老人が負かされることもありました。

この青年も老人も至ってよい人々でありました。二人とも正直で、親切でありました。二人は一生懸命で、将棋盤の上で争っても、心はうちとけていました。

「やあ、これは俺の負けかいな。こう逃げ続けでは苦しくてかなわない。本当の戦争だったら、どんなだかしれん。」と、老人は言って、大きな口を開けて笑いました。

青年は、また勝ちみがあるのでうれしそうな顔つきをして、一生懸命に目を輝かしながら、相手の王様を追っていました。

小鳥は梢の上でおもしろそうにさえずっていました。白い薔薇の花からは、いい匂いを送ってきました。

冬は、やはりその国にもあったのです。寒くなると老人は、南の方を恋しがりました。その方

1【当座】さしあたって。しばらくの間。
9【言いませんかった】言いませんでした。
10【うららか】晴れて気持ちのいい様子。のどか。

2【果たして】予想どおり。
2【梢】木の末。枝の先。
8【将棋の歩き方】駒の動かし方。将棋のルール。
10【駒を落とす】将棋で、強いほうが一部の駒を減らした状態で対戦する。手加減する。
16【勝ちみ】勝つ見込み。
17【王様】将棋の駒のうち、最も位が高いもの。

には、せがれや孫が住んでいました。

「早く、暇をもらって帰りたいものだ。」と、老人は言いました。

「あなたがお帰りになれば、知らぬ人が代わりに来るでしょう。やはり親切な、優しい人ならいいが、敵、味方というような考えをもった人だと困ります。どうか、もうしばらくいてください。そのうちには、春が来ます。」と、青年は言いました。

やがて冬が去って、また春となりました。ちょうどその頃、この二つの国は、なにか利益問題から戦争を始めました。そうしますと、これまで毎日、仲睦まじく暮らしていた二人は敵、味方の間柄になったのです。それがいかにも不思議なことに思われました。

「さあ、おまえさんと私は今日から敵どうしになったのだ。私はこんなに老いぼれていても少佐だから私の首を持っていけば、あなたは出世ができる。だから殺してください。」と、老人は言いました。

これを聞くと、青年はあきれた顔をして、

「何を言われますか。どうして私とあなたとが敵どうしでしょう。私の敵は他になければなりません。戦争はずっと北の方で開かれています。私は、そこへ行って戦います。」と、青年は言い残して、去ってしまいました。

国境には、ただ一人老人だけが残されました。青年のいなくなった日から、老人は、茫然として日を送りました。野薔薇の花が咲いて、蜜蜂が、日が上ると、暮れる頃まで群がっています。今戦争は、ずっと遠くでしているので、たとえ耳を澄ましても、空を眺めても、鉄砲の音も聞こえなければ、黒い煙の影すら見られなかったのであります。老人は、その日から、青年の身の上を案じていました。日はこうしてたちました。

1【せがれ】息子。
2【暇をもらう】退職する。
7【仲睦まじく】仲よく。
8【いかにも】本当に。どう考えても。
9【少佐】軍の階級の一つ。
16【茫然】ぼんやりしている様子。
19【身の上】境遇。状態。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は戦争についてどうなったかと尋ねました。すると、旅人は、小さな国が負けてその国の兵士はみなごろしになって、戦争は終わったということを告げました。

老人は、そんなら青年も死んだのでないかと思いました。そんなことを気にかけながら石碑の礎に腰を掛けてうつむいていますといつしか知らず、うとうとと居眠りをしました。あちらから、おおぜいの人の来る気配がしました。見ると、一列の軍隊でありました。そして馬に乗ってそれを指揮するのは、かの青年でありました。その軍隊はきわめて静粛で声をひとつたてません。やがて老人の前を通るときに青年は黙礼をして、薔薇の花を嗅いだのでありました。

老人は、なにかものを言おうとすると目が覚めました。それは全く夢であったのです。それから一月ばかりしますと野薔薇が枯れてしまいました。その年の秋、老人は南の方へ暇をもらって帰りました。

〈出典『名作童話　小川未明30選』（春陽堂書店、二〇〇九年）〉

【著者】小川 未明（おがわ みめい）
一八八二（明治一五）年―一九六一（昭和三六）年
小説家、児童文学作家。新潟県の生まれ。
【著書】『赤い蠟燭と人魚』『月夜とめがね』「時計のない村」など

5【礎】土台。
5【いつしか知らず】いつのまにか。知らないうちに。
7【かの】あの。例の。
9【全く】全て。完全に。